
IS インフィニット・ストラトス Revolution 転生者の意思(仮)

ヴァン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス Revolution

転生者の意思（仮）

【Zコード】

Z5690T

【作者名】

ヴァン

【あらすじ】

主人公最強ものです

文オが無い作者なので駄文と思いますがよろしくお願ひします。

とつあえず、がんばって書くぞー

Act -1 (前書き)

とつあえず、1話できた・・・

気がつけば俺は真っ白な廃墟にいた。

・・・って言いつか、此処どこだよッ！

俺は確か・・・ダメだ、思い出せない。

・・・休日で出かけていたことは覚えているけど。

ダメだ、やっぱ思い出せないな・・・。

IS インフィニット・ストラタス ヒブレンパワード、ガンダム
SEED & SEED DESTINY、ガンダムOO & 劇場版ガン
ダムOO～Awakening of Trailblazer
～、SRWOGジ・インスペクターの小説やマンガやDVD／ブ
ルーレイを買って、プラモも同じくブレンパワードとガンダムX，
W・SEED & SEED DESTINY、OOの主人公達が使う
機体を買ったことまではしつかり覚えているが・・・。
・・・そういうえば俺、アホみたいにお金使っていたよな。
いくら貯めても、なんか衝動買い・・・ヤメよ、なんか思い出して
いるとすゞぐむなしいや。

それより、さつさと此処から出るか・・・

「待ちたまえ、少年」

ん～でもこんな場所、家の近くになかったよな・・・?
もしかして・・・。

「お～い、そこの少年」

「ん?俺??

「そうだ」

「・・・誰だ、あなたは」

「私はアンドリュー・バルドフィルドだ」

「つそだつー？絶対違つー！死んでも違つッー！」

「冗談だ」

初対面の奴に冗談言うなよ、オイ・・・。

こいつ、頭がいってんのか？

「私は・・・君達から見れば神に値するものだ」

ああ、かかわるのやめておいつ・・・。
頭、いっちゃんていいからな・・・。

「そんなことはない。では証明してご覧に入れよう。御崎 タカヤ」

・・・ハイ？って何で俺の名前知つてんのオー？

「その一、小学生のときに幼馴染のガンダム好きに影響されガンオ
タになる」

「あやー」

「その二、高校生になつて学際ではしゃぎハメを外すきて学校の
壁を壊したな？しかも窓ガラスを計20枚・・・」

「あやー、あやー、あやー」

それとものせこだつ！

「と、すでに死んでるから恥ずかしくないぞ？少年」

「何言・・・つてなんだとつ！？」

「少年、いやタカヤ君、君はすでに死んでいる。と、言った」

「・・・なんで?」

「いやー、暇だからゴロゴロしてたら、なんかの拍子にコーヒーメーカーに当たつてこぼれたら、ちょうど開いていた少年のページにかかってしまったんだよ。それで使い物にならなくなつて、結局少年が死んでしまつた」

ひ
ひでえ
・
・
・

「つーへアンタのセーだわうがああああああーーー。」

「もう怒るな、どうせ嫌でも転生するはめになるから

「はい？」

「囃つぶしで」

暇つぶしつて……いや、転生はうれしいんですけど……。

「まあ、責任は一応感じているんでね」

一応かい…？」

「・・・まあ、そういうことでサービスで少年にじい希望の能力やら何やらやりやう。なんなら、魔改造やチート化もありだ」

「イ～ヤツホウ…」

思いつきり拳を天に挙げる。

我ながら現金な奴だな、俺は・・・。

「もうだな。まあそれは置ことじていいやつある?..」

「ん~、純粹種のイノベイターとスーパー・コーディネーター、SEED化、ブレンパワードの抗体能力、ニュータイプ」

「わかった・・・完了だ、他にあるか?」

ん~、あ・・・転生先の世界って・・・

「HS インフィニット・ストラトス だ

HSかよ・・・。いつきりガンダムだと思っていたな。

「んじや、HS「却下」なんで…?」

「こまわりだけど、HSすぐさうだとあまり面白くないな

そういう問題かっ！？

なんか嫌な予感が・・・。

「・・・と、いうわけだ」

「何がそんなわけだッ！？」

「逝つてらっしゃい。少年

「待つて つて、ついおー？」

足場がなくなり、最後まで言えなかつた。

俺は落下しながら、何でこんな時に限つて嫌な予感が当たるんだ
？ と思つて意識を落とした・・・。

Act - 1 (後書き)

誤字がありましたら、どうか指摘ください。

Act - 2

・・・転生してから10年が経過した。

この10年、色々な事があった。

生まれてから5年間は、意識がはつきりとしないことがあり、眠つてばかりだった。

・・・が、その間でもわかることがあった。

俺は、織斑 鷹夜 織斑家のの人間であり、一夏の兄で当たり前に千冬の弟だった。

無論、一卵性双生児だ。

一卵性だつたら面白くないのだろう・・・、という訳で俺は一夏とはまったく似ていらない。

似てないどころか、ほんとにこれが自分なのか疑つてしまふ姿だった。

何せ俺の姿は・・・目と髪の色が違うだけで間違いなく、ブレンパワードの主人公、伊佐末 勇なんだから・・・。

「・・・よお、一夏」

「あ、おはよう。鷹夜兄」

ボサボサな頭をかきながらリビングに入つたら一夏がいた。
ちなみに、土曜の朝9時。

「千冬姉は朝からバイトだよ」

「ん?・・・そつか」

とりあえず、椅子に座つたら一夏からの報告。

「鷹夜兄は・・・いつもお出でなつ？」

「あ〜、突然で悪いけどちよつゝ旅に出るわ

「え？」

「いや、なんかグウタラしてたら駄目になるから旅をしようと思つてな」

「バイトでためた金で何とかする。1週間くらいで帰つてくるつもりだ。もし1週間過ぎても何の連絡もないなら、そっちから連絡入れるか通報するかしてくれ。まあ、そんなことないとと思うが念のためな?」

「わかった。けど千冬姉には自分で言つてよ?」

「・・・」

「言・つ・て・よ・ね?」

「・・・わかった」

・・・あまり気いのらねえな

あの人ブラコンの症状はかなりひどい・・・。

特に俺に対して・・・夜なんか、寝るときなんかいつも無理やり一緒に寝たり、風呂に入ったり・・・。

この人、アニメでも漫画でも小説でもわかるけど、・・・ムチャクチヤいい体つきしているから、寝るときなんかいつも抱き枕状態(

主に俺が)、その上抱きしめる力が半端ないせいで色々キツイ。

必死に一人で風呂に入ると寝るのを交渉して一騒動あって、風呂は一人で入れるようになり月に一度だけ一緒に寝るという条件でまとった。

それからは、まあ普通だな・・・

トルウウウウガチャ

『どうした? 鷹夜』

「千冬姉さん、俺旅に出るわ。1週間程くらい」

『・・・・理由を聞こうか・・・・』

やつぱり無理なのか?

「特にこれっていう理由は無いんだけど、ちょっとこの町以外にも他の所も見てみたくてね・・・」

嘘です。何が嘘なのか自分でもわからんけど。アハハハハハ。

『・・・・わかった』

「本当!?

『ただし無事に帰つてこいよ』

「当たり前だ、無事に帰つて来れなかつたら姉さんの言つ事を無条件でつきいてあげるよ

何かあつたら俺が困る、うん特に俺の身体が

『ツ！…本当に…男に…言は無いな…』

「おひ、おひ」

何故そんなに食らいつくんだ織斑 千冬…！俺に何をさせん気だ…！
『冗談抜きでマジ怖いよ…！』

・・・まあいい、結果的に許可を貰つたんだ。
なら実行するのみ…！

東方やら博麗神社やら、前世の時にあつたものが此処にもあつて行って見たかった。

前世では口クに何も見れやしなかつたけど、今は口づるむかこ親はない（口づるむかこ弟と姉がいるけど…）。バイトで溜め込んだお金があるから…・・・多分、大丈夫だろう。

『…・・・ところで一週間程過ぎたら私達はどうすればいい？…・・・
一応聞いておくが』

「…・・・電話してくれ。もし出なければ一分間隔でかけてくれ。もしうなこときは俺の身に何かあつたことで通報するなつしてぐれや…・・・」

『わかつた…・・・氣をつけてな』

「うん、ありがとう。じゃあ

『ああ』

そういって電話を切った。

「どうだった？」

「バッヂ、グーだ」

「マジでか・・・」

「つい一駅で、今田から出かけるわ」

「いっ?」

「ん~昼くらいからこじょうかな? まあ今田中は近いのかわりないな。まあ姉さんが帰つてくる前だけど」

「ん、わかった」

とつあえず、その話の後、「飯を食べてから畠まで」^{ハロハロ}してから出かけた・・・

Act - 2 (後書き)

・ なんとか、やっとしまったなって感じです。

気がつけば目の前を気泡がブクブクと浮かんでいった。

此処は・・・どこだ？

頭は覚醒し切れてないが自分がどんな所に居るのかはわかる。
周りには水・・・そして橈円状に歪んだ世界。

ガラス越しには白衣の人物が数名・・・研究者か？

それにケーブルが延びてる・・・。

って一体何が起きたんだ！？

ええっと、・・・ああ、確かに途中の道のりの東京の成田空港で国際
線で・・・フランス行きの奴に乗るうとしたんだっけ？

そしたら、いきなり館内が騒がしくなつて目の前に青い何かがつて
言つてもIISなんだよな。

それが落ちてきて・・・それが確かにブレンパワードだつたなんだよ
な？

まあ、落ちてきたブレンパワードがなんといつか青だつたから・・・
まあ、あれだな。

俺は伊佐末 勇と同じだから案の定ユウ・ブレンなんだろう・・・。
ともかくブレンを何となく触れてしまつて、案の定起動してなんか
いつの間にか取り込まれていて、何故か自分の意思と関係なく飛ん
でしまつたんだよな？

そこで暫く飛んでいたら、ブレンが強制的に俺の意識をブラックア
ウトしてしまつたんだよな・・・。

なんか、何かに怯えていたつて言つかなんと言つつか・・・必死に逃
げようとしていたな、ブレンの奴・・・。
・・・で俺はこんな所で何をやってんだ？まあどうしようもないけ

どね・・・。

そして、姉さんや一夏は心配してゐるだらうな・・・。
なんか、眠いな・・・。

Side ?

数日前、我々が独自に製造したIS『アンチボディX』が無人の状態で起動し、とある方角に飛び去つた。

それはあまりに突然で対応ができなかつた・・・。

アレを今までに誰も起動させたことが無かつた。

だが、アレは自ら適合者を探し出し、見つけたのだが・・・まさかの有名な織斑家人間だとは・・・。

そして、同時に開発していた『アンチボディH』の適合者も見つかり、すでに訓練をかねたデータ採集を始めている。

だが、まさかと思ったが我々が経営している孤児院の長女でまとめる役の彼女だったとは・・・。

しかし、ISに自我があるのは知つていたが此処まで自ら動くISは多分いないだろう・・・。

それに此処まではつきりしているとは・・・興味深いな。

・・・そろそろ、Xの回収に彼女達を出すか

「チーフ、命令通りHをXの回収に出させました」

「ん、わかつた」

「しかし大丈夫でしょうか・・・」

「大丈夫、危険を感じたらすぐに帰つてくるよつて言つてある」

「そうですか・・・まあ、彼女なら大丈夫でしょうね」

「それにバイタル・ジャンプも使えるらしい……」

「…だったら大丈夫ですね」

「…だが、Xの適合者」

「…織斑 鷹夜君のことですか？」

「ああ…もともと彼以外にしようと思つていたが、やはり運命
なのかな？」

「そうだとしても私達ではどうしようもないことでは？」

「そうだね…彼らの到着を待とう」

「はい…できれば奴らと会わないことを」

1時間後。

「チーフ！！」

「！？なんだね」

「彼らが帰還しました。しかし奴らと遭遇し、何とか逃げ切ったが織斑君が戦闘により右田と右腕を損失！織斑君は意識が無く、彼女は満身創痍の状態です。一応、応急措置として治療ポットに

「そう・・・アンチ、いやブレンパワーーーたちは？」

「Hは無事なんですが、Xは織斑君と同じ状態ですが・・・バイタル・ジャンプで損失した右腕と右田をとりに行つてます・・・」

「・・・全く予想外なコトだらけだな」

「ええ。それとXと織斑君の適合率が・・・」

「Uランク以上の数値、か・・・余裕で彼女達を超えてるな

「はい・・・」

「・・・両方とも、予想外だな

「わかった」

「Xが帰還しましたら急ピッチで治療を開始します

・・・私達はもしかしたら、世界を変えてしまうような者達を引き

会わせてくるのかもしない

もしそうだとしたら、私達はこれからどんなでもない者達を見ていくのだろう・・・

このとき、私はモニター上に移る彼らを見ながらそう思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5690t/>

IS インフィニット・ストラトス Revolution 転生者の意思(仮)
2011年9月2日17時45分発行